福岡市埋蔵文化財調査報告書第1226 集

谷 遺 跡 3

― 谷遺跡第2 次調査報告 ―

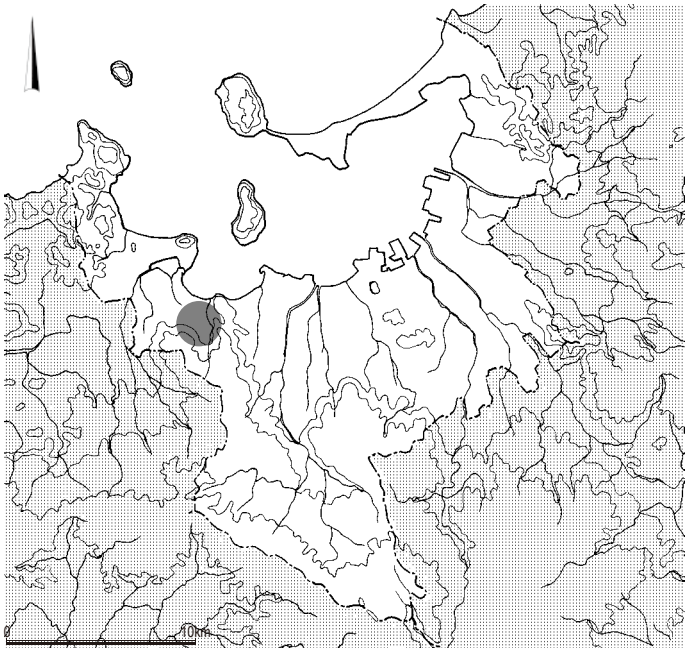
２０１４

福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1226 集

谷（たに） 遺 跡 3

― 谷遺跡第2 次調査報告 ―



調査番号 0512
遺跡略号 TAN-2

２０１４

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡市の西部に位置する今宿平野は、中国の史書にその名を残す糸島平野の東を占め、歴史的にみても重要な位置にある地域です。福岡市では、工事等により現状での保存が不可能となった埋蔵文化財について、記録による保存を図ることとし、そのための発掘調査を行ってきました。本書は、この目的で伊都土地区画整理事業地内において実施した谷遺跡第２次調査の報告書として刊行するものです。

本報告の刊行は、関係各位の多大なご理解とご協力の結果であるとをここに記し、心からお礼を申し上げます。また、本書が今宿平野の歴史について、理解を深めるための資料として資するところがあれば幸いです。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会
教育長　酒 井 龍 彦

はじめに

1　本書は、2005（平成17）年度、福岡市西区今宿町（伊都土地区画整理事業地内）で福岡市教育委員会がおこなった、谷遺跡第２次調査の報告書である。

2　発掘調査は、文化財保護法57条の3(改正前)に基づく通知を受け、埋蔵文化財保存についての協議を行った結果、福岡市都市整備局（当時）伊都区画整理事務所の依頼により、記録保存を目的として、教育委員会埋蔵文化財課（平成24年度組織改編により移管し 経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課）が実施したものである。作業は、関係各位のご理解とご協力のもと、円滑に遂行することができた。この場で深く感謝申し上げる。

3　発掘調査及び整理報告は、埋蔵文化財課（当時）杉山富雄が担当した。

4　出土資料および調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵管理し、利用に供する予定である。

凡例

1 位置の記録は、伊都土地区画整理事業に伴い設置された基準点（日本測地系）を利用し国土座標上の位置で行った。

2　調査区画については、座標系の格子を利用し、表記の標準化を図った。100 m格子を東西・南北に10分割し、さらにそれを各5分割した2 m格子を設定した。100 m格子の位置は、1㎞格子を同様10分割した位置で表示した。実際は各2桁の数字を用い、上の桁が西方向、下の桁が北方向への分割区画を示す。100 m格子に「G」を冠して記述中でわかるものとした。

例）G25-8432は100 m区画25の東から8、南から10番目の10 m区画中で、東から3、南から2番目の2 m格子。

3 図中に用いる方位は国土座標の座標北であり、真北から0°19′西偏している。

4　報告中の遺構・遺物番号は、それぞれ登録番号を用い、調査現場での記録から整理、収蔵まで一貫して管理し、台帳・図・日誌等関係に記載した情報と極力関連づけておくことに努めた。記述中必要に応じて、遺物には「R」、遺構には「M」を付した。

5　発掘調査は、今宿五郎江遺跡第 10 次調査と一体の作業となったことから、台帳は共有し、遺構・遺物、記録類にわたり、登録番号は同一系列のものを用いた。区分は調査番号で行うこととした。

遺跡調査番号	０　５　１　２			調　査　略　号	ＩＺＧ－１０
調　査　地　籍	福岡市西区今宿町 175-7、177-1、177-8、177-8			分布地図番号	１１２
工　事　面　積	130 ha	調査対象面積	422 ㎡	調　査　面　積	422 ㎡
調　査　期　間	2005(平成 16) 年 4 月 18 日 ～ 2005(平成 17) 年 7 月 6 日				

本文目次

1 谷遺跡第2 次調査の概要 ･････････････････････････････････････ 1
　伊都土地区画整理事業
　調査に至る経緯
　(2) 発掘調査の実施 ･････････････････････････････････････ 1
　谷遺跡第2 次調査
　調査地の立地と既往の調査
　調査の概要
2 谷第2 次調査出土の遺構と遺物
　(1) 包含層と出土遺物 ･････････････････････････････････････ 3
　調査区の土層 ･････････････････････････････････････ 3
　104 層 ･････････････････････････････････････ 6
　105 層 ･････････････････････････････････････ 6
　106 層 ･････････････････････････････････････ 6
　(2) 遺構と出土遺物 ･････････････････････････････････････ 6
　流路 1101 (図8･18) ･････････････････････････････････ 6
　流路 1102 (図10･11･19 ～25)
　土器投棄 1103 (図14･15･26) ･････････････････････････ 10
　流路 1105 (図16･27) ･････････････････････････････････ 10
　杭列 (図3) ･････････････････････････････････････ 11
3 まとめ ･･･ 16

図目次

図 1 今宿五郎江遺跡第 11 次地点位置図 (1:50,000) ･･･ 1
図 2 谷遺跡調査地点位置図 (1:2,000) ･････ 2
図 3 谷遺跡第 2 次調査区全体図 (1:200) ････ 3
図 4 谷遺跡第 2 次調査区全景 (北から) ････ 4
図 5 谷遺跡第 2 次調査区全景 (西から) ････ 4
図 6 谷遺跡第 2 次調査区土層図 (1:80) ････ 5
図 7 包含層出土遺物 (1:4) ･････････････ 6
図 8 流路 1101 (1:100) ･････････････････ 7
図 9 流路 1101 出土遺物 (1:4) ･････････ 7
図 10 流路 1102 (1:100) ･････････････････ 7
図 11 流路 1102 土層 (1:40) ･････････････ 8
図 12 流路 1102 出土遺物 1 (1:4) ･････････ 8
図 13 流路 1102 出土遺物 2 (1:4) ･････････ 9
図 14 流路 1103 (1:40) ･････････････････ 10
図 15 土器投棄 1103 出土遺物 1 (1:4) ････ 10
図 16 矢板列 1104 (1:100) ･････････････ 10
図 17 矢板列 1104 出土遺物 1 (1:4) ･････ 11
図 18 流路 1101 (北から) ･････････････ 11
図 19 流路 1102 検出状況 (北から) ･････ 12
図 20 流路 1102 (北から) ･････････････ 12
図 21 流路 1101 土層 (南から) ･････････ 13
図 22 流路 1102 土層 (南から) ･････････ 13
図 23 流路 1102 土層 (調査区西壁、東から) ･････････････ 13
図 24 流路 1102 遺物出土状況 (上部、東から) ･････････ 14
図 25 流路 1102 遺物出土状況 (下部 、東から) ･････････ 14
図 26 流路 1103 (北から) ･････････････ 15
図 27 流路 1104 (南東から) ･････････････ 14
図 28 矢板列分布図 (1：2,000) ･････････ 16

1 谷遺跡第 2 次調査の概要

(1) 発掘調査に至る経緯

伊都土地区画整理事業　伊都土地区画整理事業は、福岡市西部、今宿平野の東半部を対象に計画された、施工面積約 130ha の区画整理事業である。その範囲は、高祖山麓の丘陵末端に残る段丘部と、今津湾岸に生成した砂丘後背地である低地とで構成された地形上にある。この地域では、史跡今宿古墳群を構成する 2 基の前方後円墳および、各段丘を中心として遺跡が分布し、周知の埋蔵文化財として登録されてきた。

調査に至る経緯　今回調査地を含めた一帯は、2004(平成 16) 年度、調査対象地として、年度当初に確認調査を実施した。対象地の大部分は広い谷部に位置しており、西辺部が今宿五郎江遺跡中央部の台地に接していた。 確認調査では、北西部の台地縁辺部に、第 9 次地点から延びる溝及び、多量の遺物の出土が予想される結果となった。一方谷部では、地点的に杭列を確認した。

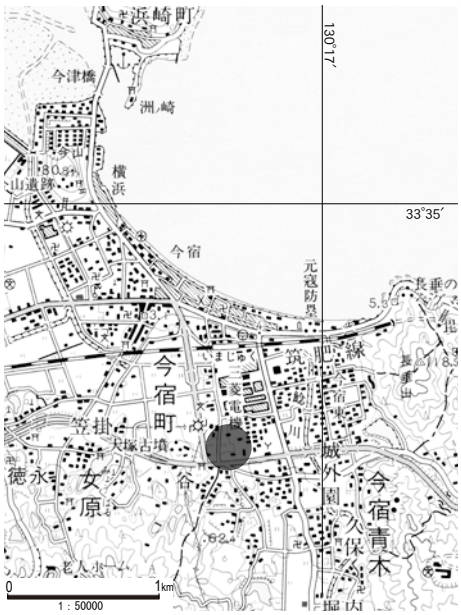


図 1 今宿五郎江遺跡第11 次地点位置図 (1:50,000)

確認調査の結果を受けて、北西部を今宿五郎江遺跡第 10 次調査として、調査に着手した。調査の終盤に掛かった時点で、確認調査で杭列等の分布をみた地点について、第 10 次調査調査区を拡張する位置に同調査 2 区及び 3 区を設定、やや離れた南に本調査区を設定した。本調査区は、谷遺跡に接し、今宿五郎江遺跡とは谷中央部を隔てた位置にあることから、谷遺跡第 2 次調査として別調査とし、他地点と併行して作業を進めることとなった。

(2) 発掘調査の実施

谷遺跡第2次調査　上述したような経過を経て、今宿五郎江遺跡第 10 調査工期に併行して 2005 年 4 月 18 日、調査区設定のうえ表土鋤取り、遺構確認へと進めた。調査区は確認調査において、杭列の分布を見た地点を中心に設定し、その広がりを追って拡張した部分がある全体の調査を完了し、埋め戻しを行ったのは 7 月 6 日のことである。調査面積は 422㎡である。

調査地の立地と既往の調査　谷遺跡は、南から延びる丘陵末端の緩傾斜地、台地及び周辺の谷部を含む範囲にわたっている。第 2 次調査地点は、丘陵の東を下る広い谷に位置する。丘陵の西側を下り、東へ向きを変えた谷の合流してくる位置でもある。第 1･2 次調査が、西側の谷の屈曲部に当たる地点で行われている。杭列等を調査し、弥生後期の遺物をはじめとした遺物の出土をみている。第 2 次地点は、第 1 次地点の南に位置し、南からの谷口に当たり、杭列が重複して打設されている。南西の尾大塚第 4 次地点に谷頭をもつ谷筋とは異なり、地形の奥に伸びる流路にあたる。

調査の概要　谷遺跡第 2 次調査は表土下の、谷部に広く分布するとみえる 4 層 (図 6- 層 a) までを機力により鋤取り、以下は、人力で掘削し、今宿五郎江第 10 次地点で基盤層とした谷堆積層相当層上面までを調査対象とした (図 6-15 層)。この間を大きく 3 層に分層、調査した。掘り下げの過程で杭列、流路を検出、調査した。遺物は各層から出土したが、密度は小さく、細片化した土器が大半を占める。流路からは、木器の出土があったほかに、剥片類が少量混じる。遺物は総量でコンテナ 8 箱ほどの分量出土した。

図 2 谷遺跡調査地点位置図 (1:2,000)

※ 数字は、調査地点 (調査次数)
IZG　今宿五郎江遺跡調査地点
OTS　大塚遺跡調査地点

2 谷第 2 次調査出土の遺構と遺物

(1) 包含層と出土遺物

調査区の土層 (図 6)　今宿五郎江第 10 次地点と共通する層 (4･15 層) と、本調査区で設定した層 (104 ～ 106 層) とがある。4 層は、本調査地点を含む台地谷部の埋積最終段階層とみられる。15 層は , 本地点では緑色味をもった灰色を呈す。以下は無遺物層として調査対象外とした。地形としての谷は更に深く、その基盤は、西岸では灰色みのある礫層 (礫混じり粘土) である。断面 C では、15 層相当部が薄層の重なりとなっており (h ～ n) 、流路に相当するものか。

4 層と 15 層の間を大きく 3 層に区分できるが、調査区内でも地点ごとの変異が著しい。

以下、上位層から出土遺物とともに報告する。

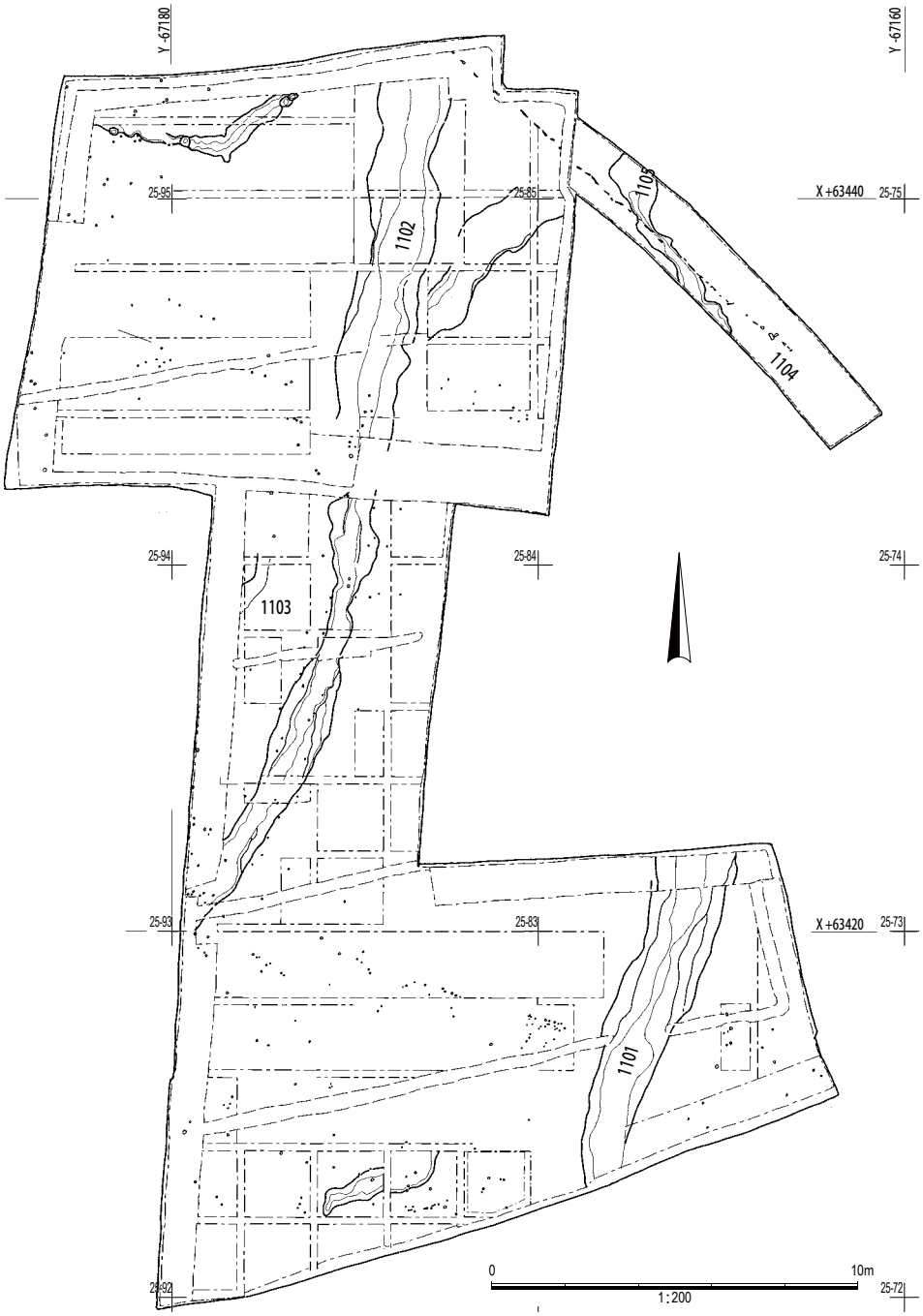
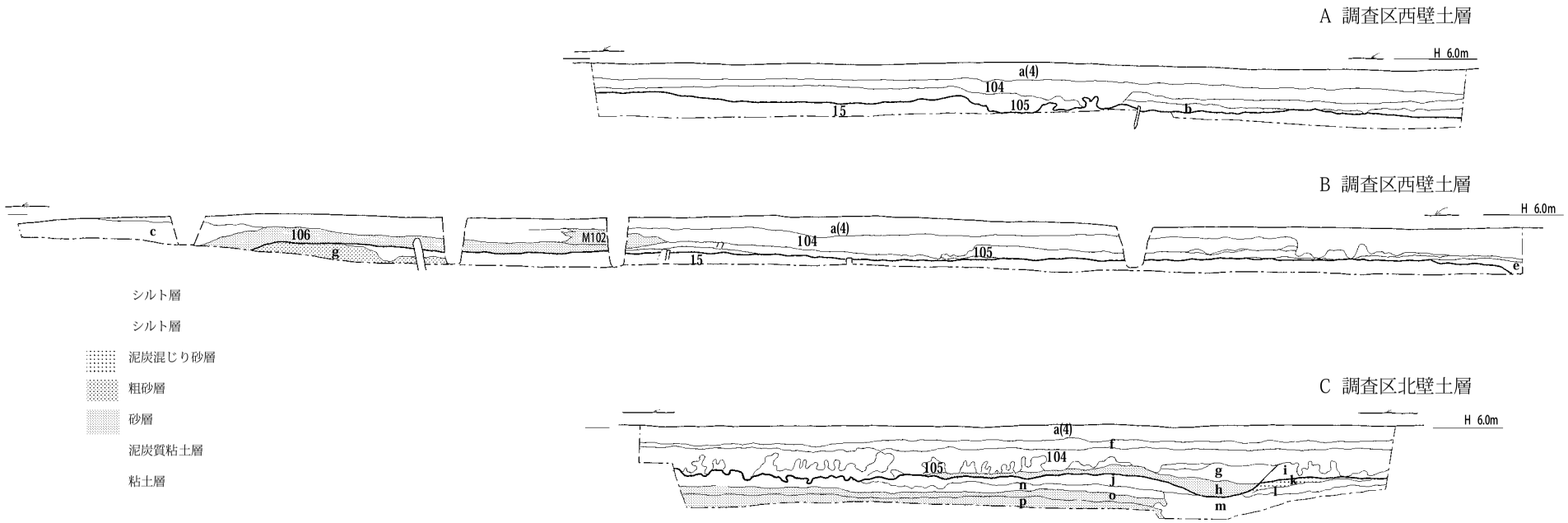
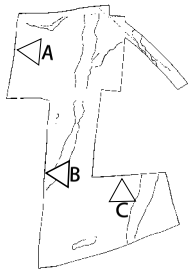


図 3 谷遺跡第 2 次調査区全体図 (1:200)

図4 谷遺跡第 2 次調査区全景 (北から)

図5 谷遺跡第 2 次調査区全景 (西から)





104 層 シルト層 黄灰色 (7.5Y a(4)/1) ～褐灰色 10YR4/1)、締まり良し。
105 層 シルト層 黒褐色 (7.5YR 3/2)、泥炭質。
106 層 砂層 にぶい黄橙色 (10YR 5/3) 粗砂層、部分的に細砂を塊状に挟む。
15 層 粘土層 緑灰色 (7.5G 5/1)。今宿五郎江 10 次地点で谷基盤層とした 5 層と同層とみる。下位に向かって砂が混じり、その分量が増加する。

a(4 層) シルト層 褐灰色 (10YR 5/1) よく締まる。上層の水田耕土床土層とするが、今宿五郎江 10 次地点の 4 層相当層か。。
b シルト層 黒褐色 (2.5Y 3/1) 有機物混じり、粘土質。
c シルト層 灰黄色 (2.5Y 6/2) 上部は暗色。**d** 砂層 灰黄色 (2.5Y 6/2) 細砂～中砂。
e シルト層 黒褐色 (2.5Y 3/1) 有機物混じり、粘土質。
f シルト層 黄灰色 (2.5Y 4/1) 植物片混じり。
g シルト・細砂互層 灰色 (Y 4/1)。上部は黒褐色 (10YR 2/2)、溝覆土。
h 砂層 浅黄色 (2.5Y 7/49 中砂。シルト薄層 (青灰色 5B 6/1) との互層。
i 細砂層 黒褐色 (2.5Y 3/2) 植物片を多く含む。105 層か。
j シルト層 褐灰色 (10YR 4/1) 植物片を含む。
k 砂層 浅黄色 (2•5Y 7/4) 細砂層で、植物片を含む。
l シルト層 褐灰色 (10YR 4/1) 植物片を含む。
m 粘土層 黒褐色 (2.5Y 3/1) 植物片を多く含み泥炭質。
n シルト層 暗灰色 (N 3/1) 植物片を含む。下部はやや明るみ。
o 砂層 灰黄色 (2.5Y 6/2) 中砂～粗砂層で、灰色 (N5) シルト塊が混じる。
p 砂層 緑灰色 (10G 6/1) 細砂層、基盤層か。

0 2m
1:80

図 6 谷遺跡第 2 次調査区土層図 (1:80)

104層　黄灰色～褐灰色シルト層。よく締まる。調査区南西部では下方に沈み込む。南東部では下面が顕著な波状を呈す。層中から総量でコンテナ 1/4 程の分量の遺物が、散漫に出土した。多くは後期弥生土器細片であるが、少量の須恵器のほか中世陶磁器の出土があった。

104層 出土遺物(図7)　6974 は、白磁碗底部、6976 は、須恵器蓋坏蓋である。以下には、後期弥生土器である。いずれも細片資料。9897･9894･9895 は甕口縁部、9888 は碗口縁部、9900 は大形壺の口縁部か。9898･9899 は甕底部である。

105層　黒褐色泥炭質のシルト層。遺物は、層中から少量が散漫に出土した。大部分は後期弥生土器細片であるが、混じって終末期の土器、須恵器、縄文土器が出土した。

105層 出土遺物(図7)　6973 は須恵器蓋坏身である。9892 は弥生土器鉢、9891 は甕である。

106層　鈍い黄橙色の砂層で、部分的に塊状の粗砂を含む。調査区南半部に下位層を削り込んで堆積する。105 層との関係が不明確。遺物は層中から弥生土器細片が少量、散漫に出土した。

106層 出土遺物(図7)　9890 は弥生土器甕口縁部である。9889 は弥生土器壺底部細片である。

(2) 遺構と出土遺物

検出して調査したものは、流路 2 条、土器投棄 1 箇所の他杭列・矢板列がある。その他に流路とするものがある。流路とするものは人為的な掘削によらない可能性が高いが、遺物を出土した。

流路 1101 (図 8･18･21)　調査区南東部に位置する。南北方向に蛇行して走る、北へ延長した位置に蛇行した流路 1105 があるが、繋がるものか判然としない。断面では、広く開く逆台形状、幅 1.5 m、深さ 0.5 mで、灰色シルト、浅黄色砂層で埋まる。下位砂層は西へ広がる。遺物は、少量の土器

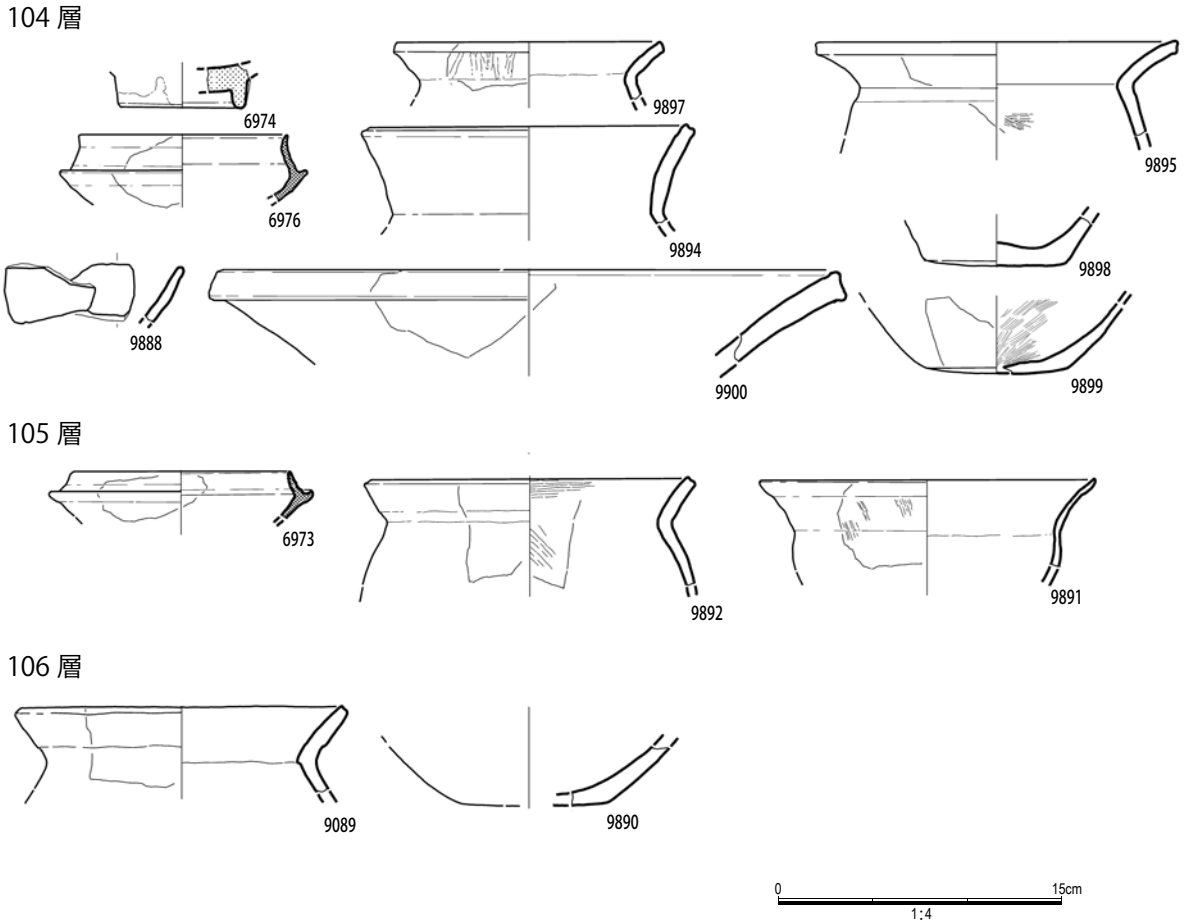


図 7 包含層出土遺物 (1:4)

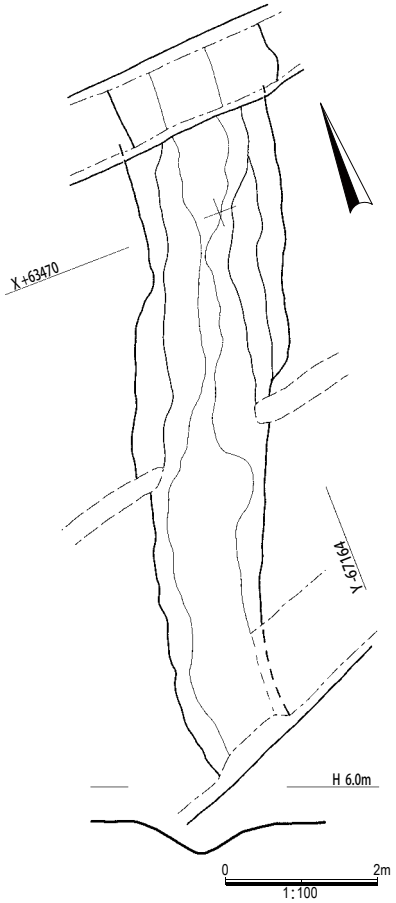
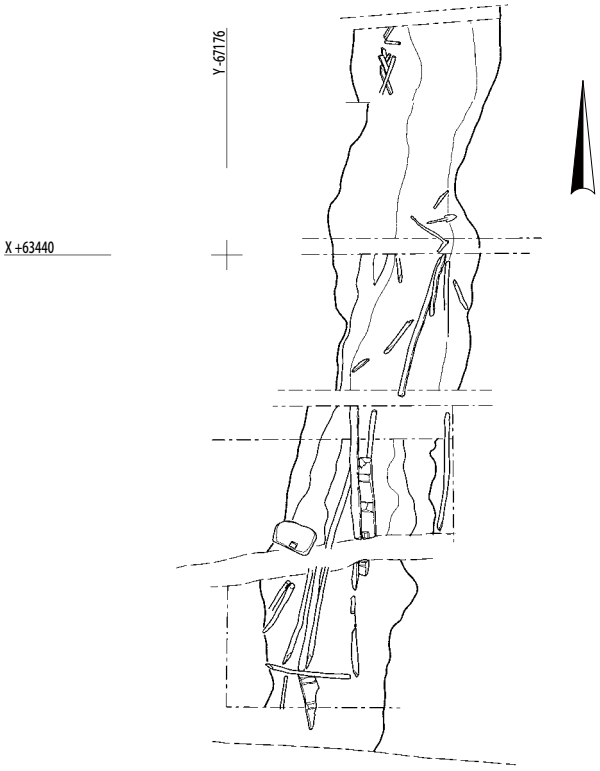


図 8 流路 1101 (1:100)



細片が覆土中から散漫に出土した。土師器の他に須恵器体部極細片、弥生土器がある。炭化した材木片も出土した。

流路1101出土遺物(図 9)　9876･9877 は土師器甕口縁部細片資料である。9876 では、胴部内面の口縁部近くまで篦削り調整が行われている。口縁部は内湾気味に広がり、端部が内方に僅かに膨らむ。

流路 1102 (図 10･11･19･20･22 ～ 25)　調査では、調査区西南部から中央部を北方向へ弧状に繋がる帯状の砂層として検出した。104 層中に埋没し、厚みのある砂堆状態で遺存

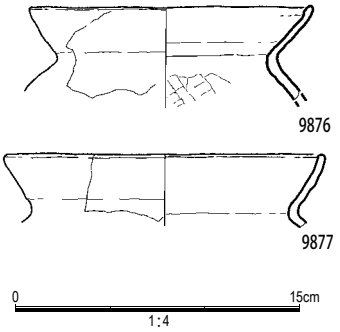


図 9 流路 1101 出土遺物 (1:4)

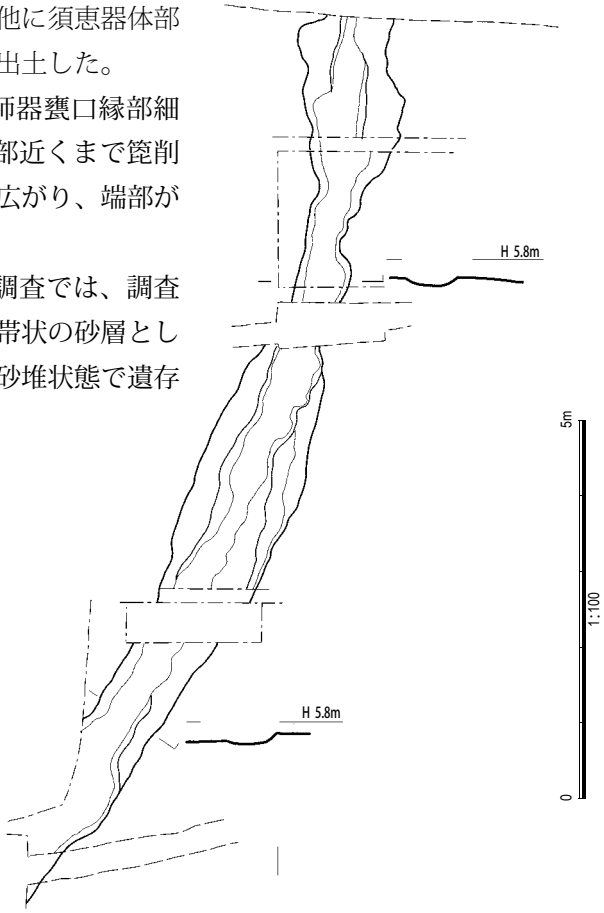
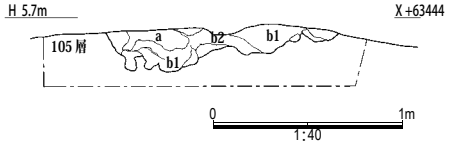


図 10 流路 1102 (1:100)



a シルト質粘土　黒褐色 (10YR 3/1) 砂混じり。
b 砂層　暗灰黄色 (2.5Y 3/2)　細礫混じりの b1 層と、比較的粒度の揃う b2 層に分かれる。葉理はみられない。

図 11 流路 1102 土層 (1:4 0)

していた。図 11・22・23 に示すように、断面では深さが殆どないか、浅く、中央部が厚く盛り上がる凸レンズ状の断面を呈す。砂層は、周囲の堆積土と見られるシルト、粘土の団塊を含み、非常に乱れた堆積を示している。また、薄い砂層が周囲に広がる部分もあり、流路 1102 とするものは、それを含む、より広い流路の流水の中心部かと思われる。調査区北部にやや広く深い部分があり、木器を含む木質遺物が、纏まって出土した。このほかの遺物は埋積土中から総量で、コンテナ 1 箱ほどの分量が散漫に出土した。大半は土器細片であり、大部分が後期弥生土器であるが、なかに中期弥生土器、古墳時代中期から後期にかけての土師器、須恵器が少量含まれていた。また、1 点ではあるが碧玉製の砕片が出土しており、攻玉残滓と思われる。この位置からの出土であることから、注意を引かれる。

流路1102出土遺物(図 12・13)　遺物中から土師器、須恵器を抽出して図12に示す。

9884・9887 は土師器甕口縁部細片である。薄く、やや内湾しながら開く。胴部との境界は強く括れる。

9883 も土師器甕であるが、やや大形で厚く、回転を利用した撫で調整が行われている。

6984・6985 は須恵器蓋坏蓋細片である。6984 の頂部から 1/3 は回転を利用した箆削り調整。

4212・7211・6986 は須恵器蓋坏身である。いずれも細片。受部の断面形に大きな差はないが、径に幅がある。

7213 は、器壁が極薄い資料。須恵器高坏脚とする細片である。

木器は、北半部から纏まって出土したもののみで、図 13 に示す。

3528 は鋤である。一木造で、柄の端部、中間部を欠く。柄が偏平となっているのは乾燥等による変形か。破片を合計した長さ 38.5cm、刃幅 8.1cm、柄長径 2.6cm を測る。

3529 は背負子部材のような形状をしている。臍穴等は見られないが、上下部が断面四辺形に整形されているようである。乾燥収縮して詳細不明。長さ 64.0cm、径 2.5cm を測る。

4076 は鼠返し。半ばを欠く資料で、断面は撓んでいる。長さ 58.5cm、幅 35.5cm。

4075・4135 は梯子である。4075 は基部側と、間を欠く資料である。踏桟部も半ば以上を欠失している。4135 は基部側の端部破片とみえる。4075 とは離れた位置から出土した。欠失面が丸みをもっているのは腐食によるものか。4075 は遺存部の計で、長さ 125cm、4135 は長さ 31.1cm。

4136 は板材である。みかん割り材で、下端部は整形されているようである。縁辺部に面取りされたような部分がある。端面は凸レンズ状で、幅は一定しない。長さ 157cm、幅 16cm、厚さ 2.5cm。

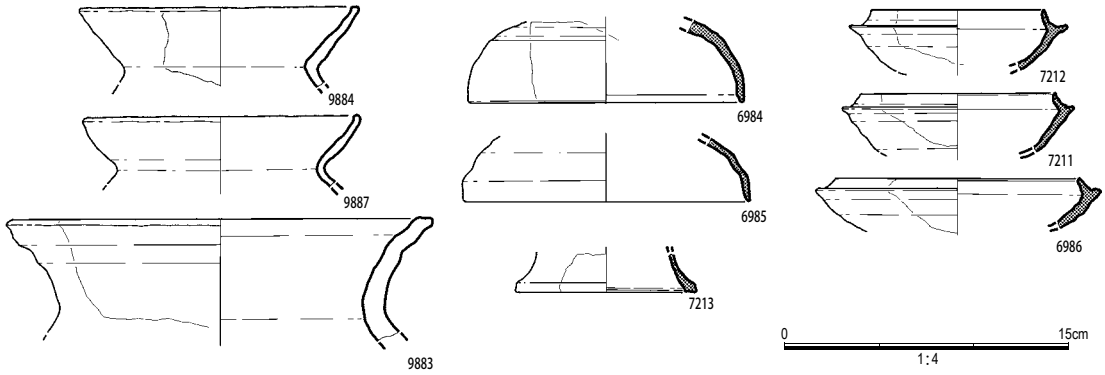


図 12 流路 1102 出土遺物 1 (1:4)

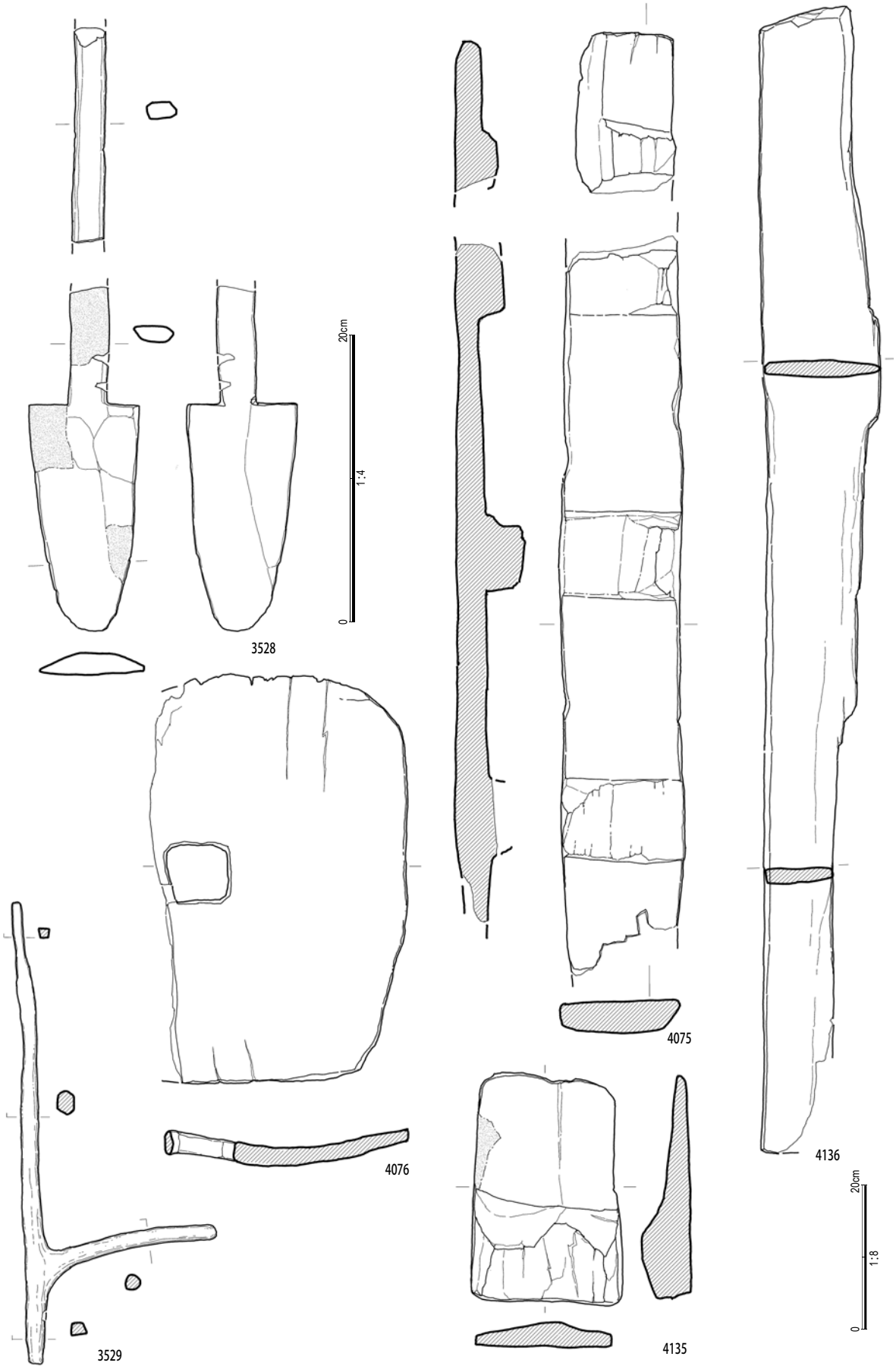


図 13 流路1102出土遺物 2 (1:4)

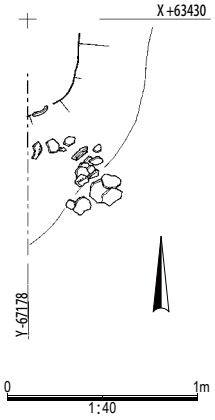


図 14 流路 1103 (1:40)

土器投棄 1103 (図 14・26)　調査区西辺部、106 層下で検出した。段落ち (流路か) を埋める暗褐色粘質土上に突帯文土器土器の破片が纏まって出土した。破片を投棄したものではなく、出土位置で圧潰したような状況をしていたが、全形が揃っているものではない。遺存状態は良好で、原位置を移動してない可能性がある。

土器投棄1103出土遺物(図 15)　3527 は突帯文土器甕上半部。資料は全周しない。底部も同一個体の可能性があるが、接合はしない。外面に厚く煤状付着物が残る部分がある。

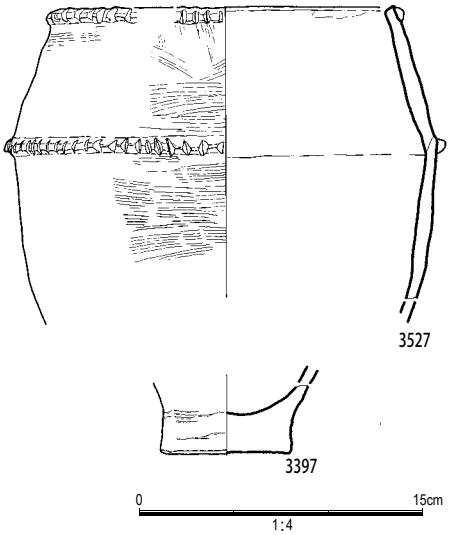


図 15 土器投棄 1103 出土遺物 1 (1:4)

矢板列 1104

(図 16・27)　調査区北東部で検出し、延長部を拡張して調査した。南東から北西へ走る。北西側は調査区外となり、延長の状況は不明。調査区内で、ほぼ直線状に走り、その延長 12.4 mを測る。調査区内での矢板列の走向は、北から 42°西へ振れている。

矢板には幅の広狭があり、先端部を造り出すものは無い。深く残るものは高さ 20cm 程が遺存し、浅いものは 10cm に届かないものがある。根入れして荷重を支えるという矢板の構造を考えると、地上部はもとより、根入れ部の上部を失った状態で遺存するものである。後述する流路 1105 等により削平されたものと考えられる。また、列の間に空間部が広く残っている部分があるのは、さらに浅い位置の矢板があったことも考えることができ、削平の程度が更に大きかった可能性もある。

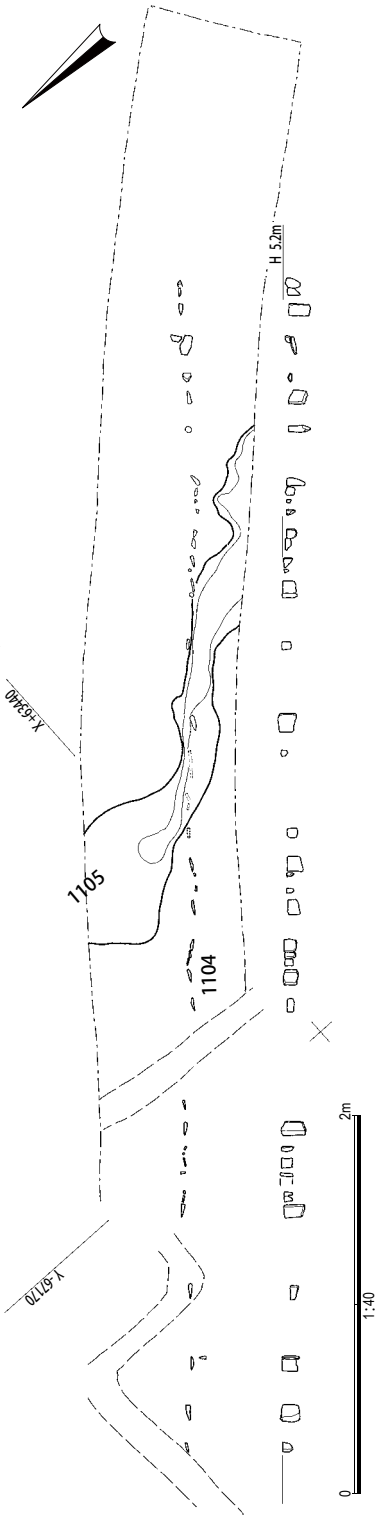


図 16 矢板列 1104 (1:100)

流路 1105 (図 16・27)　矢板列 1104 に重複して南東から北正方向へ蛇行する。浅く、不整。礫混じりの粗砂で埋まるが、その広がりは溝状の凹地を超えて広がる。流路 1102 と同様のものか。

砂層の範囲から、遺物が散漫に少量出土した。多くは後期弥生土器細片であるが、混じって土師器、須恵器が出土している。

流路1105出土遺物(図 17)　6982 は須恵器蓋坏蓋である。頂部に回転を利用した箆削り調整を行う。

9878 は土師器甕である。口縁部直下から胴部に箆削り調整。胴部が下膨れ状に膨らむ。

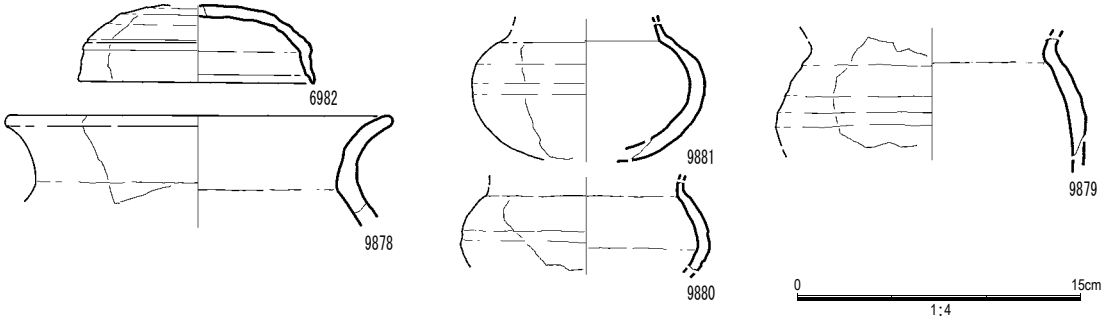


図 17 矢板列 1104 出土遺物 1 (1:4)

9881・9880 は小形丸底の無頸壺である。外面に周回方向の撫で調整を行う。

9879 は土師器壺である。外面に回転を利用した撫で調整を行う。

杭列 (図 3)　今回調査は、試掘時、杭の分布を確認したことから調査区の設定に至ったものである。全体遺構図に、杭の位置を図示した。杭は、104 層下で確認したもの、あるいは更に下位 105 層中で確認したものがある。矢板列 1104 のように明確な列の配置を示し、一定の長さ遺存するものは、他に確認できなかった。矢板列 1104 以外は、丸木、割木を用い、比較的径の小さな杭を打設する。根入れ部の遺存は矢板列より良好である。調査区の南部で、全体の分布として北西から南東方向に、部分的な配列が複数箇所観察される。一部は列というより群集したといったような分布を示すものがある。また遺存状態から比較的新しい時代の可能性があるものが混じる。各時期に必要箇所に地点的に打設されたものの集合が遺存するものか。矢板列 1104 とそれ以外の杭列については、遺存状況からもみえるように、時代的な隔たりがあるものとみえる。

図 18 流路 1101 （北から）

図 19 流路 1102 検出状況（北から）

図 20 流路 1102（北から）

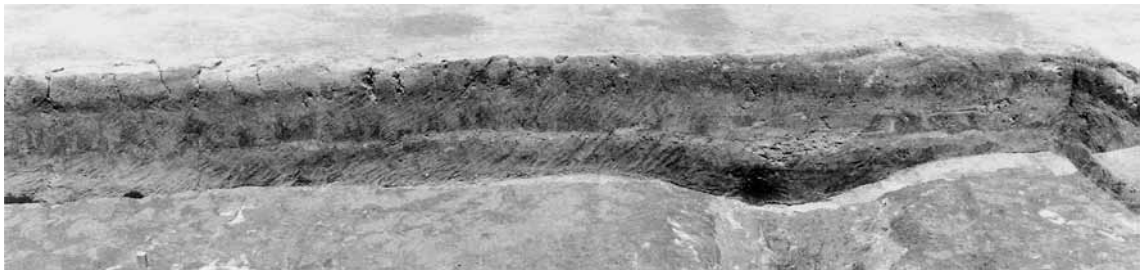


図 21 流路 1101 土層（南から）

図 22 流路 1102 土層（南から）

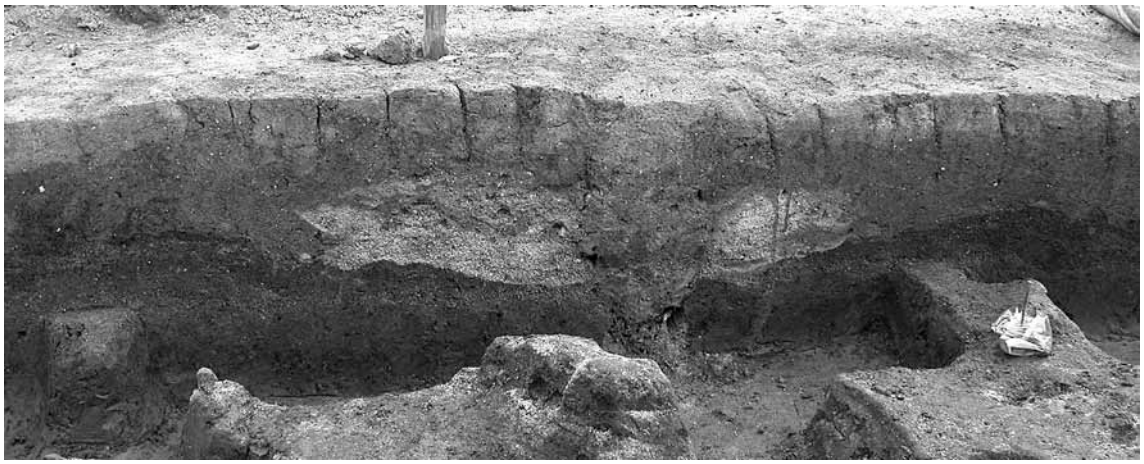


図 23 流路 1102 土層（調査区西壁、東から）

図 24 流路 1102 遺物出土状況（上部、東から）

図 25 流路 1102 遺物出土状況（下部、東から）

図 26 流路 1103（北から）

図 27 流路 1104（南東から）

3 まとめ

谷遺跡第 2 次地点は、谷遺跡の東側を北へ下る谷底に位置する。谷はこの位置で幅を大きく広げ、やや下流部で西からの流れと合流している。発掘調査は、この地点で確認調査において杭列を検出したことから実施した。結果、遺構として調査したのは杭列・矢板列等である。流路が 3 条、調査区内を流れ、遺物が出土するが、人為的な造作を見て取れず遺構としなかった。遺物は表土層以下、谷底の層とする 15 層上面までの各層から出土した。遺物量は多くはなく、特定の位置に偏って出土するなどの状況も見ることはなかった。

各層出土の遺物を見ると、各層、流路とも後期弥生土器が最も多い。それに加えて、古墳時代の須恵器、土師器が混じる層、流路があるという構成である。

包含層遺物の構成をみると、104 層・105 層に古墳時代の須恵器が含まれている。104 層には更に輸入陶磁器が加わる。流路では，流路 1101 では古墳時代前期の土師器が、流路 1102・1105 では須恵器・土師器が構成に加わる。、ここで、包含層と流路の関係をみると、104 層下、105 層上に流路 105 が、105 層下に流路 1101 が位置する。流路 1101 は 1105 と同一の流路である可能性が残るが、この部分の出土遺物でみると、最も古い時期を示すのが流路 1101 であり、古墳時代前期の土師器を出土する。105 層以下には、古墳時代後期の須恵器・土師器を含む。104 層では、中世の遺物が加わる。

以上、谷遺跡第 2 次調査地点における、包含層、流路の形成は古くとも古墳時代前期、可能性としては古墳時代後期以降を考えることができる。杭列、矢板列については、調査開始面で検出したものの他に、104 層下面、105 層下面での検出になるものがある。これらについて杭の腐食という問題が残るものの、104 層下面の杭列には古墳時代後期以降の可能性を、105 層下面の杭列には一段古い時期を性を考えることができる。

矢板列 1104 は、少なくとも流路 1105 よりも古い。遺存状態からは、他の杭列よりは著しい削平を受けているとみられることからすると、更に古い時期の遺構との可能性が高い。

矢板列は北の今宿五郎江遺跡第 10 次地点でも調査している。谷部には本地点と同様、北西方向に走向をもつ矢板列 (1119・1094) が残り、これと直交して水路状構造を示す矢板列 (1093・1095・1115) がある。また溝 427 底では堰を構成する矢板列 (1053・1070) が遺存した。しかし、今宿五郎江第 10 次地点の矢板列が先端部を作り出した矢板を用いている点で異なる。このことからすると、今宿五郎江第 10 次地点の一連の矢板列とはまた、異なる時期のものである可能性がある。

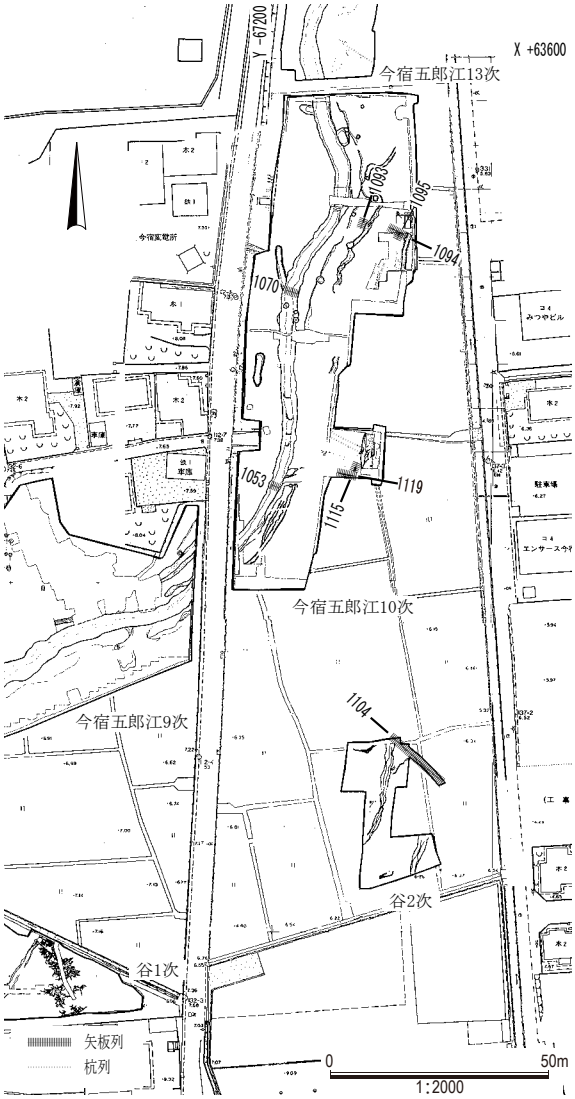


図 28 矢板列分布図 (1：2,000)

報告書抄録

ふりがな	たにいせき 3
書　　名	谷遺跡 3
副 書 名	谷遺跡第2次調査報告
巻　　次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1226
編集者名	杉山富雄
編集機関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神一丁目8番1号　TEL092-711-4667
発行年月日	20140324

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	発掘原因
谷遺跡（たにいせき）（第2次）	福岡県（ふくおかけん）福岡市西区（ふくおかしにしく）今宿町（いまじゅくまち）	40130	627	33°34′24″（33°34′36″）	130°16′26″（130°16′18″）	20050528～20050706	185	記録保存調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
谷遺跡	田畑 散布地	弥生 古墳	流路、杭・矢板列	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、木器	

要　約	広い谷に位置する。全体に谷堆積物が覆うなか、古墳時代の土器・木器を出土する流路のほか、より古い時代と思われる矢板列を調査した。遺物は縄文時代晩期の資料から出土する。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1226集

谷　遺　跡　3

－谷遺跡第２次調査報告－

2014年（平成26年）３月24日

発　行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神一丁目８番１号
印　刷　新 交 社
福岡県福岡市中央区地行１丁目11番３号